エンカウンター（ＥＮＣＯＵＮＴＥＲ）

第２６５号

2024 年 5 月 1 日

編集・発行人　〒224-0015　横浜市都筑区牛久保西 2-14-28　山口周三

電話　080-1232－0905

http://encounter.agape.wjg.jp

小西芳之助導源先生「ガラテヤ人への手紙講解説教」より（10）

「御言」とは「神の霊の言葉」、永遠の生命のこと

私はここで 17 年間、聖書の勉強ばかりをしてきましたが、聖書の言葉を話しているからと言って福音を述べ伝えているとは限りません。聖書の言葉であっても、これでは「御言（みことば）」とは言えないかもしれない。「御言」とは「神の霊の言葉」であります。永遠の生命のことであります。「永遠の生命」以外の言葉は神の言葉とは言えません。「人を愛せよ」と言っても、愛し方にはいろいろあります。親が子を愛するように、また、友人が友人を愛するように。このようなものを「神の言葉」とは言いません。「神の言葉」とは「永遠の生命の言葉」のことであります。しっかり聞いておいてください。高円寺東教会ではこれを説いています。人に親切にしなさい、というようなことはどの本にでも書いてあります。キリスト教だけではありません。「永遠の生命をもって、天国へ行く者となる、そして、人に親切にせよ」というの

がキリスト教の倫理です。

　人間は生まれつき、東を向いています。この世の方を向いています。この世の人の悲しみを慰める、この世がどうか、などと言っています。善行でも、この世を主張しているようなものは、キリスト教ではありません。キリスト教の倫理というものは、天国に関係して来なければいけない。ですから、永遠の生命のことを述べている人、そういう人から言葉を受け継いだら、永遠の生命が分かって来た。だから、永遠の生命の言葉を伝える人を助ける、これを「献金」といいます。

「福音」とは、イエス・キリストの贖い

永遠の生命は、キリストの贖いによってだけから来ます。それ以外に生命を得る方法はありません。「福音」を簡単に言えば、イエス・キリストの贖いであります。これによって、東を向いていた我々が、西を向くようになります。東を向いていて、どんなに善行を積んでも、そんなものは問題ではありません。西を向かなければいかん。よろしいですか。西を向けば、その人の顔が変わって来ます。我々、何十年教会に来ていても、東を向いておれば、それは滅びに至ることになります。まず「西を向くこと」が必要です。永遠の生命の方を向く。我々はこの「永遠の生命」のために毎日を生きているのであります。そうなってきたら、それをクリスチャンと言う。永遠の生命以外のこと、学問、芸術、道徳、その他人間にとってどんな良いもの、必要なものであっても、それは、キリスト教本来のものではありません。キリスト教本来のものは「永遠の生命」であります。これが分かっている牧師はきっと少ないでしょう。

「永遠の生命」は神様の賜物、恵み、福音

（第 6 章）8 節には、「霊にまくものは、霊から永遠のいのちを刈り取るであろう」とありますが、これはおかしいと思われるかもしれない。永遠の命はイエス・キリストの贖いからのみ来るのですから。しかし、これは、永遠の命を刈り取るための助けとなるであろう、という意味であります。「永遠の生命」は神様の賜物です。恵み、福音であります。我々の行ない、我々の信仰、我々によらずに、神の方から贖いによって提供されている賜物であります。ギフト、プレゼントです。ですから、我々側のものは一切要りません。もらったらよろしい。これが福音です。よろしいですか。

そして、もらったうえで、西を向いて、永遠の生命を向いて、それから献金し、教会に出席したらよろしい。

永遠の生命をもらうために教会に来る

教会では「よくいらっしゃいました」「献金ありがとうございました」などと言う。教会に献金するということは何ですか。そんな者は教会をやめたまえ。献金も要りません。ちょっと気分が良くなるから、教会に来ている。教会とはそんなものではありません。そんな教会でしたら、私はやめたい。永遠の生命をもらうために来ているのであります。永遠の生命をもらったら、無理に教会に来る必要はない。家で自分の仕事をやりたまえ。主人は家で妻を大切にしたらよい。妻は家にいて、主人を大事にしたらよい。教会に来る必要はありません。西向きが必要です。諸君、胸に手を当てて考えて下さい。

そして、永遠の生命、神の言葉を伝える人を助けよという。こうした人々の献金によって、福音は 2000 年続いて来ました。小西芳之助も皆さんの献金によって、生活させて頂いております。

パウロ自身筆をとって、大きい字で書いている

「ごらんなさい。私自身いま筆をとって、こんなに大きい字で、あなた方に書いていることを。」（ガラテヤ書 6・11）

ご承知の通り、パウロは目が悪く、不自由でありましたから、いつも筆記者に書かせておりました。非常に重大な内容でありますので、自ら筆を執り、大きな字で書いた。そして今私は筆をとって、あなた方に感銘を与えるために筆記者が書いたものよりもっと大きな字で書いた、と言っています。ある学者は、この手紙は非常に重大であったため、この部分だけではなく、全体の文章も自分で書いたのであろう、と言っております。この「大きな字」は原語では、「多くの字」という意味もありますので、ルッター自身、これは全部の文章である、という説を取っています。如何に重大な手紙であるかを知れば、あるいはルッターの説が正しいのかもしれません。

主イエス・キリストの十字架を誇る

「しかし、わたし自身には、わたしたちの主イエス・キリストの十字架以外に、誇りとするものは、断じてあってはならない。この十字架につけられて、この世はわたしに対して死に、わたしもこの世に対して死んでしまったのである。」（ガラテヤ書 6・14）

この（6章）14節は、本日の中心的な個所であります。自分が割礼を受けているとか、即ち、現代的に言えば律法を守っている、善行を伴っている、聖書を勉強している、教会に通っている、洗礼を受けている、聖餐に与かっている、献金している、人に対して善行をしている、そういうことを誇らずに、自分を救って下さった十字架の贖い、神の恵みだけを誇る。これが信者の姿であります。…「この十字架につけられて」という関係代名詞は、原語では、イエス・キリストにも、十字架とも取れますので、「イエス・キリストによって」と訳す学者もおります。どちらも同じことであります。即ちイエス・キリストの贖いによって我々は救われて、我々はイエス・キリストと共に十字架につけられて、この世では死んでいる。死んだ者はこの世に対して何らの見栄えはありません。パウロは、自分は十字架上に死んで、この世に対して魅力は全然ない者である、そしてまた、この世も、自分にとって何らの魅力もない、と言っております。…パウロはこの世の麗しきものは糞土のように思う、と言いましたが、同じことです。

new creation（新生）

「割礼のあるなしは問題ではなく、ただ、新しく造られることこそ、重要なのである。」（ガラテヤ書（6・15））

割礼を受けているとか、まだ受けていないとかいうことは問題ではない。問題は、イエス・キリストの十字架によって新しく造られたこと、他の言葉で言えば、イエス・キリストの贖いによって、永遠の生命を頂いたこと、これが問題である、と。「新しく造られる」とは、生まれながらに持っているものではなく、新しく創造されること、すなわち、英語の「new creation」であります。「new」という字が付いています。この世の人間側の要素というものは、救われる条件には無関係ですから、あってもなくてもよい。金も要らない、善行もいらない、命もいらない、クリスチャンという者はそういう状態にあります。まだ善行がしたいなどと思っているうちはクリスチャンではありません。善行が欲しいと言っているようでは、まだ信仰が徹底しておりません。新しい創造物になっていません。欲しい、欲しい、と思っているようでは、善行は出来ません。ユダヤ人は割礼を自慢している、異邦人は割礼を受けていないことを自慢している。学問というものは、救いと関係なく、また、無学と言うものも救いと関係はありません。重要なことは、新しく造られるということであります。「new creation」をキリスト教では、「新生」と言っています。これなくしては、キリスト教信仰とは言えません。

イエス・キリストの十字架にあらわれた「贖いの恵み」

「兄弟達よ。私たちの主イエス・キリストの恵みが、あなた方の霊と共にあるように、アァメン」（ガラテヤ書 6・18）

たった 1 節でありますが、これもまた、ガラテヤ書の要約であります。この節は実に短い節でありますけれども、この意義を本当に解すれば、私はガラテヤ書全体の精神がここに躍動して来ると思います。原語の順にしますと、始めに、「恵」という字が来ています。度々申し上げるように、始めの字が最も強調された意味を持っています。その次の強調点は最後に来ます。「兄弟達よ」であります。「神の恵み」とパウロが言えば、それは、イエス・キリストの十字架に現れた「贖いの恵み」のことであります。いつも教会で祝祷をやっていますが、この「恵み」を何百回、何千回聞いていても、これが分かっていません。この字が分かったら、我らに信仰が移る。どこの教会でも、同じこの祝祷が行なわれておりますが、これはセント・パウロの言葉ですよ。

ガラテヤ書最後の言葉――兄弟達よ、アァメン

ここで「イエス・キリストの恵み」とは言いません。「主・イエス・キリストの恵み」と言っています。これがイエスのフルネームであります。主イエス・キリストが再臨し、我々人類を救わんとするその愛が、如何によく現われているかが分かります。この「恵み」が「あなた方の霊と共に」とあります。あなた方と共に、という言葉は他にもありますが、ここでは「霊と共に」と書いてあります。即ち、人間というものは、人間についたものが見える。学問、善行、あるいは教会へ通っているとか、これらは見えることであり、肉についたことです。肉につくことも必要です。けれども、汝らの霊と共に、とあります。恵みというものは霊に生きる問題であります。

そして、この厳しい手紙の最後に、ガラテヤ人に対して「兄弟たちよ」と言っております。ルッターは、「愛する兄弟たちよ」と「愛する」という字を入れました。これは誤訳であるという人もいますが、私は、実にこれは名訳であると思います。このガラテヤ書は「兄弟たちよ」という字で終わっています。そしてパウロは「アァメン」と言いました。パウロはまだ「兄弟たちよ」だけでは言い足りなかった。パウロの深い心の中の感情の深さを現すために加えた、と書いてあります。…言葉は足りませんけれども、実にこの素晴らしい手紙の終結から、我々、少しでも学ぶことが出来るよう祈りたいと思います。